

「プロジェクトみそ」始動 ～ 準備

みそは本校児童にとってはとても身近にある存在で、よく食べるという児童がほとんどであった。祖母が家で造っているという児童も数人いたが、実際に自分がみそを造ったことがあるという児童はいなかった。全員で調べ学習をし、みそ造りを行うにあたって必要な道具や造り方、必要なこと、気を付けることなどを学ぶことができた。そして、造ったみそをどのように活用するか話し合い、みそ造りの見通しを持つことができた。



<乾燥大豆を戻す>



乾燥大豆は2日間水に浸しておくで完全に戻るといふ児童の調べ学習の結果をもとに、2日間水に浸し冷暗所に保管した。戻った大豆に加え、大量のあくにも驚いていた。ここまでの過程は児童が行い、その先は講師を招きご指導いただくことにした。

みそ造り ～ ゲストティーチャー 坂本みち子さん・関根さち子さん

<みそ造りを行う様子>



こうじをつぶすことから始まった。「食べると甘い」ことを教えていただき味見をすると「本当だ!」という声が挙がる。

圧力鍋を使うことが初めてという児童が多く、音が鳴り出すとそばに行き驚いた表情を見せる。



茹であがった大豆を棒でつぶし、そこに塩とこうじを入れ、手でまぜる。

蓋をして完成まで待ちます。「10月までは開けてはいけないよ」と言われ、誰にも開けられず、涼しい場所を校内から選び、保管する。



造ったみそは「みそのすけ」と命名された。

「みそを造っている様子をアメリカの小学生にも見せたい！」という児童の意見から、班に1台ipadを持たせ、写真や動画を撮らせた。「こうしているところを撮ったほうがいいんじゃない?」「ここから撮った方が何をしているか分かりやすいよ」などと声をかけ合いながらとることができていた。また、ゲストティーチャーとして来ていただいた坂本さんと関根さんへのインタビューの時間を設け、児童が気になっていることを質問することができた。みそができた後どうすればよいかやカビの処理の仕方など不安に思っていることも聞けたようであった。

白方のよさをアメリカの小学生に伝えようプロジェクト① ～テーマ選び・自己紹介

児童は、これまで総合的な学習や社会科などにおいて、白方について学習してきた。6年生になってからも、ふるさと学習や国語科の「まちのよさを伝えるパンフレットを作ろう」という学習で白方について学んできた。これらの経験から、自分たちが考える白方のよさを見つけ出し、ビデオレターにして伝えることになった。「何を発信したいか」を話し合わせ、5つのグループができた。①自分たちの学校②学校の周りにある自然③白方にある名所④日本の遊び⑤日本の文化、の5つである。児童は、昨年度の6年生の作品や活動の様子等も見てきているため、「まずは自己紹介の動画を撮ろう」と声が挙がる。法政大学の坂本旬教授に来校していただき、表情が分かるようにバストショットで撮るとよいことを教えていただくと、すぐに実践する児童の姿が見られた。

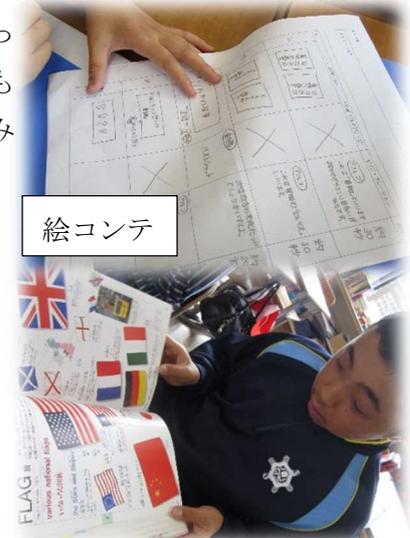
<自己紹介の絵コンテ作成・撮影の様子>



白方のよさをアメリカの小学生に伝えようプロジェクト② ～撮影・編集

初めに、自分たちは何を伝えて、相手にどう感じてほしいのか(メッセージ)を考えさせた。メッセージが伝わるような映像にするためには、どのように撮影したらよいか考えさせ、絵コンテに描かせた。絵コンテを描き終わると、次々と写真や動画を撮りに出かけて行った。絵コンテを描くことにより、見通しを持つことができ主体的に活動できるようになった。映像を撮ると、英語で字幕をつけるとより分かりやすくなるのではないかと話す児童が出てきて、辞書や図鑑などを使って調べる姿が見られてきた。遊びグループは「アメリカの小学生におもちゃの作り方を教えて、遊んでほしい」というメッセージを立て、休み時間になっても一生懸命におもちゃを作る姿が見られた。

<撮影・編集の様子>



絵コンテ

白方小の周りにある自然について映像を作っているグループのメッセージは、「アメリカの小学生に白方の自然はすごい！と思ってほしい」というもの。学校の敷地にすぐそばを流れる川やビオトープを撮影している中で、「白方小の周り全体を映したい」という意見が挙がった。そこで、福島大学の三浦浩喜教授にドローンを持って来ていただいた。初めてドローンを見た児童は興味津々に三浦教授のドローンの説明を聞いた。全員でドローンが動くところを見た後、自然グループの撮影に移った。児童は絵コンテに沿って三浦教授にドローンを動かしてもらうようお願いをした。どのように撮影されたかすぐに確認させてもらった。児童は信じられない高さから撮られた見たことのない白方小の周辺を見て、とても驚き、「緑ばかり」「あ、ここが〇〇さんの家だ」「平らだね」などつぶやいていた。児童の思いから生まれたドローンを使っての撮影には、他のグループも影響され、「私たちはこうやってみよう」と新しいアイデアが生まれるようになってきた。

<ドローンを使っての撮影の様子>



白方のよさをアメリカの小学生に伝えようプロジェクト③ ～3年生と合同授業

本校の3年生は大豆についての調べ学習を行っている。そこで、「調べた内容をパワーポイントにまとめたものは分かりやすくなっているかを6年生に見てもらい、アドバイスが欲しい」との3年生からの申し出があった。目的を持って聞く力、視点に沿った発言をする力等が身に付くと考え承諾した。児童は、「発表内容」に視点を当てて、よかった点やアドバイスを書くことができた。自分の意見が人のためになる喜びを感じることができた。

<合同授業の様子>



白方のよさをアメリカの小学生に伝えようプロジェクト④ ～祖父母参観に向けて



10月21日に行われる祖父母参観における白方フェスタに向けて話し合いをした。何事にもメッセージを大切に取り組みせたいと考え、「見に来てくれる人にどう感じてほしい?」と問いかけると、「立派だな、と思ってほしい」「白方のよいところを改めて感じてほしい」などの意見が挙がった。今年が最後の発表となるため、出来る限り児童の思いを反映させたいと考え、発表の形式も児童に考えさせた。話し合い、劇で自分たちの今までの学習活動や作ったビデオレターを発表することに決まった。

また、ストーリーは児童が30歳になる年に同窓会を開き、そこから昔を思い出す流れにし、一工夫入れたと思ってもらえるようにしたとのことだった。どのようにすれば、自分たちの頑張りや工夫点、メッセージが伝わるのかを考えさせながら、練習させてきた。当日の発表は大きな声で堂々で行うことができた。そして、自分たちが作り上げたものを発表することに達成感を感じることができた。

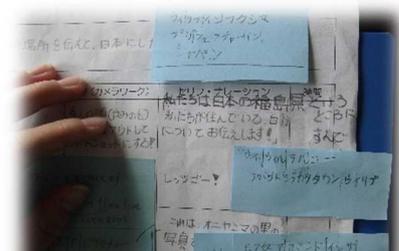
<白方フェスタ発表の様子>



白方のよさをアメリカの小学生に伝えようプロジェクト⑤ ～ 英語に直す

白方フェスタが終わり、本格的にビデオレターを完成させる時期になった。白方フェスタでは相手は日本人だったが本来送る相手はアメリカ人であることを再確認し、話していた日本語を英語に訳す活動を行った。再び、坂本旬教授に來校していただき、児童の支援をしていただいた。児童は、辞書や google 翻訳を活用して直していった。坂本教授からは、同じ発音で意味が違うものがあることや、言葉だけではなく表情やジェスチャーなどで代わることができるものもあるのではないかといい、話していただいた。児童は、非言語であるものでも思いを伝えることができることに気づき、神社のお参りを「プレイ」と言うだけでなく、お祈りしている姿を写真にとって入れようなどとする動きが見られた。

<英語に直している様子>



白方のよさをアメリカの小学生に伝えようプロジェクト⑥ ～ 5年生との合同授業

11月10日には、ESD研究発表会で5年生と合同で授業を行った。5年生は、ビデオレターの間発表会を行い、6年生は5年生にアドバイスをする時間である。6年生児童は、精一杯5年生の困っている点についてよいアドバイスをしようと考え、発表することができた。また、よかった点だけでなく、疑問点やアドバイスなども付せん書きで発表することができていた。批判的に考える力も身に付いてきたと考えられる。発表会の後、6年生と5年生のビデオレターを比べて気付いたことを発表させると、「BGMをあまり使っていない」「自分達が活動している様子を動画でのせている」「英語を紙に書いて持っている」などの意見が挙がった。これらのことからすぐに生かせそうなことを各グループで話し合わせ、修正する時間を設けた。

カメラワークや音声の録音などに何度も失敗を繰り返しながらも、白方のよさをアメリカの小学生に伝えるためのビデオレターが完成した。完成したビデオレターは、坂本旬教授がアメリカへネットを通

じて届けてくれる予定である。また、作った日本のおもちゃは、カンボジアやネパール、アメリカの小学生に届けてくれることになった。返信がとても楽しみである。

みそを通して白方や日本のすばらしさを伝えようプロジェクト① ～みそフェスに向けて

1つ目のビデオレターが完成し、6月に仕込んだみそのすけを開封する日となった。10月5日に開封すると決定し、その日を児童は楽しみにしていた。開けてみると、予想していたカビはほとんどなく白カビが少しあるくらいだった。児童はカビについても調べていたため、「白カビはそのままでいいんだよ」という意見が出てきて、困ることはなかった。

できたみそを全員で味見をし、「どう？」と聞いかけると、「しょっぱい」「ちゃんとみその味がする」「こうじのつぶつぶが残っている」という言葉が聞こえてきた。また、樽の底を見て「しょうゆができています！」と言った児童がおり、みそから、たまりしょうゆができることに気付くこともできた。出来上がったみそをどのように保管するのも事前に調べさせておき、当日はラップで器用に包み、冷凍庫に保存した。みそを造った感想には、「本当にできてすごい」「大人になったら自分で造ってみたい」などと書かれていた。

教室に戻り、「出来上がったみそはどうする？」と聞いかけてみた。すると、「食べる」という意見がほとんどだった。「誰が？」と問い返してみると、初めは「自分たちが」という意見だったが、次第に「お世話になった人に食べてもらう」や「地域の人」、「全校生」という意見も出てきた。「でも、そんなにみそはたくさんないよ？」と再度問い返すと、「在校生は3年生だけにしよう」や「それでは、他の学年がかわいそうだよ」などと活発に意見が出てきて、具体的な話につながっていった。みそを使った料理を振る舞うことは決定し、そのイベントの名前を「みそフェス」と題した。みそフェスを行う意味（メッセージ）を全員で話し合わせ、みそフェスの詳細を決定した。「グループに分かれて準備した方がいい」という児童の意見からグループ分けを行った。主体的な活動としたいため、人数に目処はつけたものの男女混合にするなどの条件は付けなかった。

<みそ樽を開封したときの様子>



みそフェスをどのように開催しようか3つのグループで話し合いを行った。①さそい方②フェスの中のイベント③料理の3つである。どうやって誘えば地域の人に来てくれるだろうか、食べるだけでなく作ったビデオレターを流すブースを作ろう、みそについての豆知識を会場に貼ろう、地元の野菜を使ったみそ汁にしよう、などたくさんの意見が飛び交い、どの児童も主体的に話し合うことができた。

<準備の様子>



みそを通して白方や日本のすばらしさを伝えようプロジェクト② ～ポスターセッション

みそフェスの準備を行っていく中で、児童はあることに気付いた。実は、1つ目のビデオレターの一番最後に出来上がったみその写真を載せ、「What's this?」と字幕をつけたのである。そのことや、豆知識を会場に貼ることから、自分たちがまずはみそについて詳しくないといけないと気付いたのである。そこで、みそに関係することで興味のあることを調べる活動を行った。初めは個人で調べ学習を行い3回目の調べ学習が終わり、何を調べたのか交流する時間を設けた。イメージマップを描きながら、似ている種類の人同士でグループを組ませた。①種類②栄養③歴史④外国との関係の4つである。2つのグループからアンケートをとりたいという声が挙がり、用紙を児童が作成し、全校生にアンケートをとった。

1つ目のビデオレター作成の際に調べ学習を十分に行わず、いきなり絵コンテを描かせ映像をとらせた。その時の反省を生かし、児童にもっとメッセージを大切にビデオレター作成に取り組んでほしいと考えた。そこで、今回は一度ポスターに調べたことをまとめる作業をし、自分たちの思いや願いを可視化した上でビデオレター作成の活動に取り組ませた。

1月14日にはESDの校内研究でポスターセッションを行う授業を行った。発表者と訪問者を交代して行い、分かったことやもっと知りたいこと、感じたことなどを付せんにかかせた。訪問者は6年生の予定だったが直前に先生方からも意見をもらいたいという声が挙がり、先生方からもアドバイスや疑問点を書いていただいた。(詳細は授業研究の様子を参照)メッセージが思うように人に伝わらないことを実感し、少し落ち込んだ様子も見られたが、よりよいビデオレターにするために必要な活動であることを児童に伝え、次への意欲付けをはかった。

<調べ学習の様子>



みそフェス開催は2月を予定している。現在は、調べたことをビデオレターにするため、ポスターや写真、動画を使って映像を作成中である。児童の思いをできる限り実現できるようにするとともに、話し合う楽しさを感じることができるよう継続して指導していく。自ら企画した「みそフェス」。開催がとても楽しみである。

② 白方小学校の ESD の視点に立った学習指導で育む能力・態度について

<多様な観点から考え、見通しを持ってよりよい解決策を考える力>

- 調べ学習では、自分の興味関心をもとに主体的に調べることができた。
- みそを造っている家庭がまだ残っていることや白方のみその味を知ったことで、みそのすばらしさに気付き、今後もずっと残していきたいと思うことができた。
- ビデオレターの作成では、最終ゴールとメッセージをもっと具体的に示し取り組ませるべきだった。見通しをもっていつまでに何を終わらせるということが不明確だったため、作成にとっても時間がかかった。
- ポスターセッションやビデオレターの中間発表会に臨む時の児童の意欲をもっと高めたい。そのためには、「中間発表会の意味」をきちんと理解させたうえで、発表練習の時間を十分に確保し、自信をもって発表できるようにすることが大切である。児童から「中間発表会をやりたい！」という話が出ればさらに主体的になると思う。また、日頃から他教科においても、班ごとに学習成果を発表する場を設け、発表する楽しさを味わえるようにしたい。

<気持ちや考えを交流させ、協力して取り組む態度>

- グループで話し合う前に個人で考える時間を確保したことで、一人一人が自分の考えを持ち、友達に伝えることができるようになってきた。
- 特別活動や他教科においても話し合い活動を多く取り入れることで、友達と考えをつなげながら話し合うことができるようになってきた。
- 相手に分かりやすく話すという点には課題があるため、話し合いのスキルをもっと向上させたい。
- 調べたことを発表し話し合う場面では、BGM や字幕などではなく、写真を流す順序や使う材料など、内容に迫った話し合いになるよう、工夫する必要がある。
- ビデオレターの作成に時間がかかり、発表の練習時間の確保が足りなかった。短時間で発表することができるようになってほしいと思ったが、これまでの学習でそういった形態での発表をしてこなかったため、できなかった。学年の目標を定め、その目標を達成できるよう、様々な場面でポスターセッションのようなことを何度も経験させていくことで児童一人一人にプレゼンテーションのスキルを身に付けさせたい。

<さまざまな人や社会、自然などとのつながりを尊重する態度>

- ゲストティーチャーや坂本旬教授、三浦浩喜教授など、外部講師の方に来ていただき、児童の願いを実現することができた。
- みそが昔から今まで残っていることなどから、みそのよさやすばらしさをに気付くことができた。
- アメリカについての調べ学習が十分にできなかったこと、ビデオレターを発信する時期が遅くなってしまったことから、アメリカの文化について深く知ることができなかった。つながりのある人にアメリカについて教えていただく機会や、児童の疑問点を解消する機会を設ける必要がある。

<よりよい未来をめざし、その実現に向けて主体的・計画的に取り組む態度>

- 時間がかかったが、少しずつ自分達で役割分担をしながらポスターにまとめたり、ビデオレターを作成したりすることができるようになってきた。
- 計画を明確に立てることができず、計画的に取り組むことができなかった。まずは教師側が1年間の見通しを明確に持ち、児童とともに計画を立てる時間を十分に設けることが必要であると感じた。